

ひろば



※学校・家庭・地域は三位一体 「伝え合い、つながり合おう」～ともに学び、ともに育つ～※

学校教育自己診断アンケート(1回め) 結果・分析

8月28日、第2回「学校運営委員協議会」において、アンケート結果から見てきた課題を共有しました。各項目については、表のとおりになりますが、この中でも特に「課題」として捉えたものをお知らせします。



1. 児童の大人への相談(困ったこと、いやなこと) …質問8・9(児童)

約80%の児童は、相談するなどしている。しかし、2・3年生では約15%、4～6年生では、約20%が、十分に相談等ができていない。直接、話をするだけでなく、定期的なアンケートや生活ノート等、様々な形態で児童の相談事が思いを汲みあげる「しくみ」と時間的余裕が必要。

2. 落ち着いた雰囲気の中での授業 …質問21(児童)

約80%の児童は肯定的だが、約20%の児童は否定的である。授業では、教師が一方向的に教え、児童はだまって話を聞いたり、板書を書いたりするのではなく、児童同士の話し合いや教え合い、タブレットや図書等の学習ツールを使った学習等、活動が主であり、静かな教室が「落ち着いている」ということではない。どの子にとっても、心理的な安全が守られ、安心して学べる教室が「落ち着いている」と捉えることが大切。

3. 学習時の質問等 …質問26・27(児童)

授業で分からない時に「わからない」と伝える児童は約80%。分からなくても、そのままにしている児童が約20%いる。また、自ら質問をする児童は、2・3年生で75%、4～6年生になると59%である。今年度の校内研では、すべての児童が安心して学ぶ授業づくりに取り組んでおり、誰もが「わからない」「教えて」と安心して言える教室環境の醸成に取り組んでいる。落ち着いた雰囲気とともに、まちがえても、分からなくても、「わからない」「教えて」等と、自ら助けを求められる教室空間と仲間づくりを毎日の学習活動で進めていく。



4. 自ら学ぶ姿勢 …質問30・53・54・55(児童)

すべての学習において、児童が自ら「課題」を持ち、解決するために、何をどうするのかを考えながら学習活動に取り組んでいるかどうかをはかっている。低学年のうちは、与えられた課題に対し、どうすれば解決できるのかを教えてもらうことが多いが、学年があがるにつれて、前に学習した事も用いながら、解決に向かうことが増えてくる。受け身ではなく、「どうしたら解けるか」「何を使ったら分かるか」等、自分で試したり、考えたりすることが大切。学校では、教師が教え込むのではなく、児童に「学び方」を身に付けさせることが必要。また、学校だけでなく、家庭でも「なんだろう?」「どうしてだろう?」と疑問や課題意識を持って、自ら調べてみる自学自習に向かう姿勢を養いたい。また、学校と家庭の連携も大切。家庭における時間的余裕や環境、日常生活での経験や体験も、解決に向かうための重要な要素になる。



5. 「学校・家庭・地域」三者のつながり …質問59・60・61 (児童)

コロナ禍の影響で、人とのかかわりが少なくなって数年。コロナが5類に移行したことで、徐々に以前のような形態に戻りつつある。しかし、「働き方改革」の観点から、すべてをコロナ禍以前と全く同様にすることはできない。工夫・改善をしつつも、学校が家庭や地域とどのようにつながっていくのかを考え、実践することが大切。「学校まかせ」「家庭まかせ」にするのではなく、学校がすること、家庭がすることを明確にするとともに、学校でも家庭でもできるような「しくみ」「方法」を模索、構築して取組を進めたい。また、地域にも協力をお願いし、連携した取組もこれまでと同様に進めたい。



どんなことをしたら、みんなにとって、もっともっと良くなるだろう？

クラスや学年、家族や地域の人といっしょに考えてみよう！

- 学校や地域で、元気よくあいさつする。顔見知りになる。
- 津田小学校が、「もっといい学校になったらいいな。」
- 「食」や「健康」について考え、行動する。(特に、4～6年)
- 健康のために、スマートフォンやゲーム等の使い方を考える。
- 世の中のためになることをする。
- 自分には、「よいところ」がある。(特に、4～6年)

友だちや仲間といっしょに楽しい学校生活にしたいな。
家族や地域の人とも、いっしょに勉強したいな。

